「第５回　阿武隈川上流緊急治水対策環境委員会」議事録（要旨）

日　　時；令和８年３月10日（火）14:00～15:45
場　　所；国土交通省　東北地方整備局　福島河川国道事務所　会議室（WEB会議併用）
出席者；長林委員長、田端委員、髙橋委員、黒沢委員、川越委員、堀江委員、齋藤委員

～主な委員意見～

・　鎌田地区の管理指標について、砂州高だけでなく相対水深という概念が導入されたことは、大変良い事だと思う。
・　今回実施した平面二次元河床変動解析で洪水後の河道がどの程度再現されたのか、計算の妥当性について再検討をお願いしたい。なお、精度の高い再現結果を求めているわけではなく、実際に発生した大規模な出水であるR1.10洪水を用いて、河床変化の再現性について確認をお願いしたい。
・　連関図でインパクトレスポンスを系統的に示せたことで、色々な事が管理できるようになったと思う。現在、三次元ではなく四次元化の流れがあるので、時間軸の情報を意識したライフサイクルコストも検討していただきたい。また、10年後にはテクノロジーも大分変化すると思われるため、今後の維持管理を検討する上でベースとなる知見を、今回のモニタリングの中で蓄積していけると良い。今あるものを大事に使って将来の管理に活かしていただきたい。
・　今回の検討が魚に及ぼす影響を考えたとき、工事現場における施工業者の施工方法の問題を非常に心配している。今後は環境も考慮して対応するということだが、漁業者にとっては施工時の濁水の問題等の方が現実的に重要である。検討成果が机上の空論で終わらないよう、施工業者と十分に調整した上で理想に近づけた対応を取っていただきたい。
・　生物の面で見ると、河川敷の樹木を好む昆虫や鳥類が存在することや、その樹木が創り出す環境を好む魚類が存在するため、河川敷の樹木は必要なものであると考える。河川を治水の面で見ると、流下能力を確保するため樹木伐採を実施すると思われるが、景観や動植物の多様性を考慮すると、全て伐採することは適切ではないと考える。
・　相対水深の管理基準について、場所によって管理指標となる数値が異なると思われるため、全国の様々な河川から情報を収集して活用すると良い。
・　対策工事から６年ほど経過し、定点写真によるとやや再堆積・再繁茂が進行しているとのことであるが、この状況で流下能力はどの程度減少しているのか。当初の想定に対して、余裕があるのかどうかを確認するのが良い。
・　「掘削敷高を平水位程度とした掘削の場合、頻繁に冠水するため再堆積しにくい」という、一般的に言われる知見と同様の傾向が見られると思われるため、須賀川地区の掘削敷高も同様に平水位程度とするのが望ましいと考える。
・　河床材料調査について、東根川地区の調査箇所３は堆積が顕著であり、粒度分布を見ると比較的粗めの土砂が堆積していることから、主材料（掃流砂）が堆積していると考えられる。一方で調

査箇所 1 は、粒度分布は類似しているが、調査箇所 3 より倍程度細かい土砂が見られるため、主材料が堆積すると、その背後により細かい土砂が浮遊して堆積する特徴があるものと思われる。他の箇所においても同様の傾向が見られるため、細粒分が後背湿地に堆積しているような調査箇所 1 で、そのような環境を好む植生が今後繁茂する可能性が考えられる。そのような植生の応答も注視すると良い。

- 掘削後の河道で堆積が生じ、さらに小規模な出水が続いたときに、植生の繁茂が想定される。その際に、所定の流下能力を満足できるかについても検討することが良いと考える。
- 各重点監視箇所のインパクトレスポンスの分析を今後実施する際には、平水位掘削かそうでないかだけで再堆積の有無が決まるのか、なぜこの地点は再堆積してこの地点はしていないのかが見えてくると良い。
- 土砂の再堆積や樹木の再繁茂は植物の根茎の状況が影響してくると考えられる。ヨシの場合は特に問題視されないが、マダケ、ハリエンジュ、ハチクなどの根茎の有無でその後の再堆積や再繁茂状況も異なってくると考えられるため、掘削工事の際に根茎を残さないことも考慮しながら管理すると良い。
- インパクトレスポンス図について、与えた計算条件に対しての分岐ではなく、与えた河道に対して来襲する流量に応じて判定する方が分かりやすいと考える。与条件の河道と流量の組み合わせに対して、現在のインパクトレスポンス図のフローのどちらに判定され、パターンが分かれていくかを考えることが必要である。
- 平成 25 年河道の出水後河床について、この河床を管理砂州高 T.P.+51.9m で掘削した断面に対しての予測もあると良い。そうすることで、その後の管理を含めて掘削断面の提案ができる。